

平沼騏一郎枢密院副議長が施行させる第 1 回「朝鮮全道自治選挙」の前後

判澤 純太*

(令和 2 年 1 1 月 3 0 日 受理)

Tokonami, Hiranuma , the Lines of Korea's Autonomous 1 st Election

Junta HANZAWA*

A Governor-general of Korea was subjected to the secretary of inner affairs of Japan's Cabinet. Takejiro Tokonami was the man estimated as if behaved only as a power pursuer only to become a prime minister converting political parties . but , before Kiichiro Hiranuma's appearance , Tokonami was the one who succeeded to prime minister Hara's idea to enforce Korea's autonomous general elections eliminating the military.

key words: Takejiro Tokonami, Korea's autonomous 1 st election

Kiichiro Hiranuma, "Suhmitsu -in"

1. はじめに — 床次竹二郎と第 2 次普選

満州事変直前の状況は、満州在住の漢人と関内北部 5 省の漢人が共に抗日意識をいかにも覚醒させ、抗日気配が深刻であるとの漠然たる感覚の危機感だけを、日本国内で「満蒙危機」として突然仰々しく宣伝された根拠にあった。ただし、「満蒙線競合問題」による「満鉄運転収益」の最近の激しい落ち込みを、目敏い人は注目していた。第 2 次若槻政権（31 年 4 月 1 4 日成立）の内相（内務大臣）に安達謙蔵が任じた。安達は先んじて第 1 次若槻内閣、浜口内閣でも内相を務めていた。

戻ると、27 年 3 月 1 日「憲（政会）・本（政友本党）連盟」で、24 年 6 月 2 4 日から政友本党を率いる床次竹二郎の加勢を得て、30 年 2 月 2 0 日第 1 7 回総選挙（29 年 7 月 2 日成立の浜口内閣が「憲・本合同」の民政党政権で施行した第 2 次普選）は、「ポスト・田中義一政友会内閣（27 年 4 月 2 0 日成立）」期に臨む浜口雄幸総裁が率いている「立憲民政党」（27 年 6 月 1 日結党）が絶対多数議席（民政党 2 6 9 , 政友会 1 7 2）を獲得した。

* 工学科（基礎教育・教養系）教授 国際関係論

Professor , Division of Fundamental Education and Liberal Arts , Department of Engineering

2. 床次竹二郎の政友会離脱、政友本党の結成

(1) 水野錬太郎朝鮮政務総監の任命

薩摩出身の床次竹二郎（とこなみ・たけじろう）は、原敬・高橋是清の両内閣にわたる内相（内務大臣）を務めていた（原敬内閣は鉄道院総裁も兼務した）。原敬・政友会総裁は、床次を次世代立憲政友会指導者として嘱望していた。

床次竹二郎については、宰相の座を生涯追い続けたが衰れに失敗した「宰相 hunter」に終わったに過ぎない、と冷笑する、あまりに多い評論を今迄に見かけるが、床次竹二郎という政治家は単純に、そんなに軽薄に政治家人生を送った凡夫だろうか？

19年8月12日、それは「3・1万才事件」直後に、斉藤実朝鮮総督と水野錬太郎・朝鮮総督府政務総監は朝鮮に着任した（2人は南大門で早速テロ攻撃を浴びたが生き延びた）。水野錬太郎は内務次官上がりであり、5ヶ月余は寺内内閣内相も経験した。水野政務総監は、その当時官庁で日本の「地方自治法」の大権威になっており、博士号資格者になった。その後、水野錬太郎は22年6月15日にその任を解かれた。

その任期が終了すると、水野は直ちに加藤友三郎内閣、そして清浦内閣の内相に任じ、両内閣の中心的存在になった（ただし、その間に挟まる第2次山本内閣では内相に後藤新平が任）。斉藤実と水野錬太郎という2人を朝鮮に送り込んだ人物は、原敬内閣内相の床次竹次郎だったと判明している。

24年1月15日、高橋是清・政友会第4代総裁はその最高幹部会で、「自分は子爵の爵位を投げ打ってでも華族から平民に戻って来たる衆議院議員選挙に立候補し、必ず清浦貴族院内閣を打倒して見せる」と気迫激しくブチ上げた。小泉策太郎総務は、脱党者はせいぜい20～30人ぐらいだろうと楽観し高を括っていたが、24年1月16日、それは7日の清浦奎吾貴族院内閣が成立した直後にだったが、立憲政友会（高橋是清総裁）から74名が、床次竹二郎・筆頭総務ら4幹部を先頭に脱党した事を魁に、反高橋派の脱走者148名が帝国ホテルに集結し、29日「政友本党（21日に立ち上げた新政俱樂部を改称）」を立ち上げるに到った。

その行動は、山縣有朋が22年2月に病没した後、政界の流動化の激しさを政治背景にしていたことを否めない⁽¹⁾。政友会（高橋）、憲政会（加藤高明）、革新俱樂部（犬養毅）ら3派「護憲同盟」が誕生する（29日）見通しが予めあるので⁽²⁾、「貴族院・枢密院」連合、「護憲3派」同盟に対峙しようとの「第3極」作りが試みられたのである、と解釈が出来る。衆議院議席は、政友会129、憲政会103、革新俱樂部43、政友本党149で、つまり政友本党が清浦内閣の「与党」になって、議会で第1党勢力を形成した。憲政会は本質が山縣系の清浦「超然」内閣に反対するのであって、必ずしも貴族院を敵視はしない。高橋政友会新総裁も、自身が華族（子爵）にも貴族院議員にも一旦なっていたのだから、体質はほぼ同じだった。

さて、戊辰戦争の敗者・賊軍出身者を自認する原敬は、先んじて政友会の普選運動を

朝鮮半島へも並行的に拡大したいと、遠大なる計画が胸中に秘められていた。その為に原は、「普選即行」論に反対したのである。その様な政治の方向性は、何かと貴族院に泣き付きたがる憲政会には到底打ち出せなかったし、他方原の後継者になる事が求められる高橋総裁にしても、同様に無理があった。

床次竹二郎は、自分が政友本党を新結成したらば、原敬前首相のその、嚴重に秘匿された政略の継承者になれる、と覚悟を固めたのだったろう。それゆえ床次は敢えて分派行動に踏み切った、と見なせる。しかも、床次は、諸政党中最多の新政党の形成に、一時成功した。だからこそ床次は、高橋是清に合同しなかったのである。

高橋是清が政友会総裁に選任される21年11月14日には、対抗馬に床次竹二郎がなるかに見られたが、床次自身はその時には総理候補には加藤友三郎が相応しいと想定していた⁽³⁾（実は、それは高橋是清内閣の継承内閣で実現する）。加えて床次は、内相は自分ではなしに、水野錬太郎を任じさせたいと考えていた。なぜなら入党から未だ日が浅い床次に、政友会党人派長老幹部を纏め切れなかったことがその理由だった⁽⁴⁾。

加藤友三郎は、22年6月には確かに組閣要請を受け容れたのだが（内相は水野錬太郎が任）、だが前21年11月時点では、逡巡した。ならばと宮中席次順で高橋が原の後任総裁に決定して高橋が組閣する経緯になった。

加藤友三郎内閣は貴族院内閣にならざるを得なかったが、西園寺が静岡興津邸で病に倒れていたから、一人残る元老たる松方公が加藤友三郎を推奏した⁽⁵⁾。加藤友三郎は23年8月5日に死去した。

原敬は、長閥代表者の桂太郎と寺内正毅が既に「日韓合邦」を断行した厳然たる歴史前提を承認しつつも、そこから「第2の明治維新」をスタートさせ、そして真の「政党政治」が実現されるなら、その時こそ戊辰戦争の屈辱が晴らせる、と信じた。だからこそ原は、あらゆる爵位を決然と拒否し通した。原敬は、その政略が結実すれば、更に朝鮮半島に1,000万人以上の有権者が確実に生まれるだろうし、そこから100人以上の政友会系朝鮮人議員が本土の衆議院に登院させられる、とも見通しもしていた。その時期に立憲政友会は、揺るがぬ長期支配体制を日本政治上に築く政党に変化蘇生するだろう、と原敬は展望した。

以上に見られる原敬の政略の外枠は、第1次西園寺内閣内相時代の原敬の、以下の3つの人事に特徴的に表明されていよう。

1つ目は、07年4月1日に土佐藩出身で長閥出身でない楠瀬幸彦中將を樺太庁初代長官に抜擢した人事（陸軍における長閥崩し）である。2つ目は原内閣内務次官床次竹二郎・前内務省地方局長を樺太庁第2代長官に、2ヶ月弱の短期間ではあったが長閥の武断支配を退ける「文官」長官として兼務させた人事である。3つ目は、寺内正毅長閥の看板であった明石元二郎（中將）第7代台湾総督を更迭し、貴族院茶話会の中心人物たる田健次郎（でん・けんじろう）に19年10月29日（朝鮮「3・1事件」後である）に代えた人事である。尚、第3番目の人事については、原敬首相が19年8月20

日制定した、植民地総督資格に関する「文武両官併任用改正」制に基づく典型人事であった。貴族院茶話会の中心者であった田は過去に、第1次山本内閣に海軍拡張予算削減（斉藤実海相）を要求し、同内閣を倒壊させている。

朝鮮に憲兵政治を過剰に徹底して「3・1万才運動」を導く結果になった明石元二郎を新設の台湾軍司令官に転じさせ、「文官」たる田健次郎・台湾総督の指揮下に属させた。ちなみに、それ以前に明石は、07年10月3日少将に進むと共に、第14憲兵隊（10月7日韓国駐サツ憲兵隊に改称）長に任じていた。「朝鮮駐サツ憲兵隊条令」施行によって、明石は朝鮮憲兵体制大拡張政策を実施した。

原敬の手による台湾総督更迭人事は、必ずや次に朝鮮総督の人事に繋がるだろう、と周囲の人々は予想した。寺内総督後に、原内相は内務省からの床次竹二郎朝鮮総督かあるいは海軍の退役たる斎藤実の「文官」朝鮮総督を据え、「武官」の朝鮮軍司令官をその指揮下に隷属させる法整備の取り組みに進むだろうと、台湾の人事の前例を見る誰にもミエミエだった。

ところが、朝鮮半島へ「普選」を拡大するとなると、現地各産業を振興させればさせる程、それらの工場や事務所内へ極東ソ連や中共満州部から激しいオルグ活動が浸透する可能性も高まるが、ところがそのリスクをさえ織り込み、その上朝鮮半島へ普選運動を普及する活動の展開を、原と床次は、本格政党内閣作りの基盤に見なしたのであった。

斎藤実総督が19年8月に発した最初の赴任宣言は、「朝鮮の土地において、言論、集会の自由を広く認める」というものだった⁽⁶⁾。一方で原敬は、朝鮮人の国会議員が将来、帝国議会に進出することに何の問題も無い、と悪びれずに公言した⁽⁷⁾。

そもそも原敬は、朝鮮半島上に政友会支部を「合法的」に建設する活動になりふりにかまわない。水野錬太郎は、斎藤実・朝鮮総督の政務総監として、主に畜産組合、綿業組合活動を推進した。床次竹二郎内相は、鉄道院総裁（原内閣期）を務めた経験（15万人の本土鉄道員の頂点に鉄道院総裁として立った）を有したから、朝鮮の鉄道員組合組織化を後押しした。ただし留意すべき側面は、この様な政策でもあくまで合法活動である。たとえば、28年末、民族改良主義を掲げる「新幹会」（27年2月設立）は、支会数が朝鮮の全土に143处、会員数は4万人を超えたのであった。

（2）床次竹二郎と水野錬太郎の人間関係

原敬内閣は内田外相と陸海軍大臣の他は全閣僚と内閣書記官長、法制局長官も政友員を起用した。原内閣、高橋内閣を通じて3年9ヶ月も内相を務めた床次竹二郎の、内政自治の功績としては、第1に、郡制廃止に関する「市町村制」が挙がる⁽⁸⁾。床次は35年9月8日、第2次若槻内閣連任相在任のまま、心臓性喘息で70才で急死した。

床次竹二郎は水野錬太郎より帝国大学で2年先輩であった。床次は初めは大蔵省に入省して、次に内務省地方局長に転じた。なお、それ以前に愛媛県収税長だった頃、その

後任が若槻礼次郎だった。原敬が第2次西園寺内閣（11年8月30日成立）内相だった時に、水野（土木局長）は床次先輩（地方局長）に次官ポストを譲った⁽⁹⁾。

床次が政友会に入党する時期は、第1次山本内閣鉄道院総裁に任じたのと同じ頃で、原敬の紹介により床次は入党した⁽¹⁰⁾。水野錬太郎は生涯で3度に亘って内相を務め、その就任度数では、原敬にも匹敵している。

水野は朝鮮政務総監に任ずるに当たって、床次の行政手腕をよく学んだ上、朝鮮に「組合」組織化、「青年会」組織化活動の積極化を図ろうとする決意を、21年10月18日総督府内務部長会議の席上で披露した⁽¹¹⁾。原は、朝鮮予算の独立性を高める事と、「府協議会」の組織化を充実させることを、水野に任務として与えている。

水野政務総監はその朝鮮での任期中に、憲兵警察制度を「普通警察制度」に切り換えた他、陸軍が要求した「総督付き武官制度構想」を撥ね付けた行動が特筆できる⁽¹²⁾。

（3）「憲・本連盟」

26年1月28日加藤高明首相が急死（悪性肺炎）するより以前に、26日に若槻内相が首相を兼摂していた。宇垣一成、財部彪が宮中席次は若槻男爵より上だったが、加藤高明は若槻を首相代理に任じていた。1月30日、若槻に大命が降下した。

27年3月1日、第1次若槻憲政会内閣の下に「憲・本連盟」が誕生した。現下の第52回議会の状況は、憲政会166、政友本党88だった。確かに両党連盟が過半数を占める。

5月20日、若槻首相は床次竹二郎・政友本党総裁を、床次の麻布三河台の自宅に訪問して連立内閣を提案した⁽¹³⁾。ところで、第1次若槻政権は、閣僚構成にいかにももの矛盾があったと指摘できる。

同内閣は、加藤高明憲政会単独内閣が停止し26年1月30日に急遽代りに生まれたが、その元の第1次加藤護憲3派内閣（24年6月11日成立）は、清浦奎吾貴族院支配内閣の打破を世に謳って樹立したにもかかわらず、そもそも加藤高明が子爵貴族院議員だったし若槻礼次郎にしても貴族院議員だった。先に第2次護憲運動の標的に定められた清浦奎吾内閣は、閣内に7人貴族院議員閣僚を擁したが、それから3代目に成立した第1次若槻内閣の閣僚を調べると、同じく7人が貴族院議員だった。

床次竹二郎の政友本党総裁就任は — その一方加藤高明護憲3派内閣が24年6月11日に成立している — ，6月24日だった。清浦内閣は、第15回総選挙（24年5月10日）で、議席構成比が、政友会101、憲政会154、政友本党114だった。

その後、加藤高明単独憲政会政権時代に、第51回議会で87人の政友本党議員が議場に姿を見せていたし（憲政会165、政友会161）、第1次若槻憲政会政権下に第52回議会は88人の政友本党議員が議場にいた（憲政会166、政友会158）。加藤高明単独内閣から第1次若槻憲政会内閣にかけて、憲政会が少数与党で苦しんでいた

一方、政友本党が「与党」に加勢したから「キャスティング・ボート」を握って、加藤高明憲政会単独内閣から第1次若槻内閣を支えた。

ところで平民宰相・原敬は「普選引き延ばし」を表明したことによって、それ迄「普選」運動を追求して来た同志の悲願を大きく裏切った形だったが、その原は、「普選」の施行以前に、前述したが、朝鮮半島各処に、実は政友会支部を合法的に建設する猶予の期間を欲しがっている。21年11月4日、原敬は東京駅頭で中岡良一に刺殺される。

原敬の腹案は、治安法を配慮したから非公然だが、「理財均衡至上主義者」の高橋是清とは到底考えを共有出来なかった。高橋翁にすれば原の思想は当然ながら「過激思想」であろう。ただし「統帥権」、「帷幄上奏」を弄んで只管権益膨張欲を示したがる軍部を抑制する対極に政党を置きたい、という部分でなら、原と高橋の考えが完全に一致した。また高橋是清・立憲政友会総裁と床次竹二郎・政友本党総裁の間も、その点には考え方のズレはない。

元々、高橋も床次も、板垣退助が明治14年（1881年）に創建した自由党が根っこに有る立憲政友会に帰属する者同士だったが、床次は、憲政党を貴族院・枢密院から出来る限り引き離す事に専ら熱意を注ぎ、でき得れば政友本党が憲政会員を部分的に多数吸収して、その上その後に政友本党を政友会に改めて合流させられるのなら、その新状況下では、床次が高橋派から更に政友会の主導権が取り返せる、と考えていた節が窺われる。

25年2月21日第50議会には、若槻内相（第1次加藤高明護憲3派内閣）と政友本党の「普選」（4月22日治安維持法公布、5月5日普選法施行）に対する考え方の「一致点」（差異点でなく）が表れた、と読み取れて非常に興味深い。発言者は治安法に配慮しているから、その本音はベールを被せて慎重に発言している、と留意する。

若槻内相いわく、「陛下の忠実な臣民はおしなべて選挙権を持つべきで、区別があってはなりません。ただし、その権利は奪い取るものではなく、陛下から与えられるものなのです。付与の早い遅いは、政治的能力の早い遅いに比例します」。

床次・政友本党総裁のいわく、「わが日本国の国体の基礎は家族制度であります。固守にではなく、25歳以上の世帯主に選挙権を与えることが現段階に適っています」。

つまり、両者の発言を読み抜くと、両者は若槻は朝鮮半島への普選の拡大を否定していないし、床次は、（世帯主ならば）女性にも選挙権を与えよとまで主張している。

ただし、法改正を議会で通す為には、貴族院・枢密院がその道の途中で厳しい「関門」を設けて立ちはだかった。だが朝鮮半島に関する制度改革に、貴族・枢密両院からいかに妨害があったとしても、それに対する阻止行動の総括指揮揮う人物が、意外に日本政界に歴史上やがて登場した。その人物は意外にも、平沼騏一郎・枢密院副議長だった。

25年1月21日、北京の日本公使館では、「日・露（ソ）協定」（芳澤謙吉・カラ

ハン）が締結された。護憲3派第50回議会（24年12月24日召集）は、貴族院に関する有爵議員数の絶対多数制廃止を採択した。政友本党は当初有爵議員比率4割削減を要求したが、貴族院との妥協で150名を上限とする案で決着した。政界で、「憲・研連合」を「憲・本連盟」が牽制してこそ、両件は実現したのだった。

同第50回議会後に、政友本党は党内に、英国の1867年選挙権大拡張の後の政治的影響の測定に関する一専門的研究機関を設けた。他方武藤山治の実業同志会と提携する「政治更新連盟」も設立した。陸軍機密費乱用問題をその共同研究のテーマにした⁽¹⁴⁾。一方田中義一は依願予備役となり、25年4月9日に政友会総裁へ就任すると受諾した。

5月14日、革新、中正両倶楽部が政友会へ合同した。5月30日、犬養毅が第1次護憲3派内閣連相を退いた。

（４）「憲・本合同」

原敬首相（18年9月29日内閣成立）は、貴族院を事実上牛耳っている研究会との交渉連絡を高橋蔵相に一切関らせなかった。その任務を原は床次内相の専権事項にしていた⁽¹⁵⁾。27年5月3日、田中義一内閣が成立（4月20日）した2週間後、床次竹二郎は「新党倶楽部」（憲政会院内団体届け出）を結成した。5月4日開会第53回議会は、政友会新党倶楽部の議席が230になった。それは6月1日に、「憲（政会）・（政友）本（党）合同」に到る。

解散した政友本党と憲政会が合同する形で「民政党」があらたに結党された。民政党は、「浜口総裁、床次顧問体制」で発足した。ただし床次と若槻は実際上は、顧問に祭り上げられている。10名の民政党総務の比は、憲・本で6対4である。

田中義一は、このように床次の新党倶楽部を政友会内に取り込むことができないまま田中内閣を発足させた。その失敗の原因は、主に田中義一首相の体質にあったといえる。

床次竹二郎は、田中首相の考えが、自分（床次）が原から受け継いでいる対朝鮮政策に合致するかどうか、を見極められず、田中の本性に対する警戒心を解けなかった。そうならば、床次の次善策は、浜口雄幸と共に新生の民政党を創建するという考えの方を勝らせた。「旧・憲政会党人派」に民政党内から旧・政友本党が加勢したならば、民政党の「貴族院・枢密院派」に対抗するポジションが相対優位に高まる。

（５）「政・本合同」

28年5月25日、政友会大会に田中総裁排斥ムードが横溢した。同8月1日、床次竹二郎は民政党から脱党すると、8月9日新党倶楽部を結成した。そして翌29年7月5日、新党倶楽部は政友会と合同した。9月18日新党倶楽部は解散し、うち21名が政友会へ入党して、他は無所属になった。だが、その決断は田中義一が死亡する（9月29日）ようやく11日前だった。その前に、29年7月2日田中義一内閣が総辞職し、同日、浜口雄幸民政党内閣が成立している。

10月12日に、犬養毅が政友会総裁に選出された。その時点で床次竹二郎は僅か3ヶ月前に政友会に戻っているから、護憲派で名を大いに売った犬養毅とは争えない。

床次はかつて、高橋是清・政友会総裁から離反し、清浦奎吾・貴族院内閣首相も批判して政友本党を設立していた身の上だった。今、政友会では総裁ポストから高橋是清が既に去り、次の田中義一総裁も失われていた。

(6) 護憲3派内閣と軍部の軋轢

1924年6月7日に戻って、清浦首相が桂冠し、9日、加藤高明憲政会総裁が次期首班に指名され6月11日に組閣した。ちなみに24日に、政友本党は床次竹二郎を総裁に推した。

24年後半、浜口蔵相、江木翼（えぎ・たすく）書記官長が、陸・海軍の制度に根本的改革を加えようとの意欲を見せて、6ヶ師団廃止、憲兵制度廃止を主張した。だが、宇垣陸相は4ヶ師団削減の対抗案を打ち出したし、財部彪（たからべ・たけし）海相も、別個に軍費削減に反対する趣旨の異議を唱えた。高橋農商相（政友会）、横田千之助法相（政友会）、犬養通相（革新倶楽部）らはそれに「建設的整理」論で対抗した。

後者の人々は、これまで放置されていた臨時軍事費特別会計の整理と大蔵省預金改革に手を付けることに合意した。当初の原案は約3億円に近い行財政整理案だったが、結局は、国家予算減額は前年度に比べて9,100万円に留まった。

25年5月30日、犬養通相が辞職し、安達謙蔵（民政党）が後任を務めた。岡崎邦輔（農林相）及び小川平吉（法相）ら閣内の政友会から噴出する異論を押さえ切れない、という理由で、護憲3派内閣は25年7月31日に潰れた。

加藤高明護憲3派内閣は、「普選」、「貴族院改革」を2枚看板の政策に掲げていたが、前述した様に、加藤高明（総理）も若槻（内相）も、幣原（外相）さえ貴族院出身閣僚で、貴族院臭がすこぶる強かったことが否めなかった。加藤も幣原もいわずと知れた大財閥・三菱の女婿なので、大衆運動を組織する為には大いに差し障った。

政友本党は、「過激社会主義運動取締法案」を議会に提出したが、実は「貴族院改革」の方に圧倒的に力点を置いていた。政友本党は第50回議会（24年12月26日召集）以降、1867年の英国選挙権大拡張「後」の研究に力を入れている。

25年2月4日、護憲3派作りの中心に存在していた横田千之助法相が56才で流感で亡くなった。翌26年1月28日朝、加藤高明が危篤状態に陥って同日死亡した。この時点で、我々には床次竹二郎が狙った「憲・本連盟」の本意がはっきり見抜けるのである。その意図とはもちろん、「普選」の施行の前に「貴族院・枢密院連合」（華族、勅撰議員、多額納税者、なかでも実力者は、官僚・閣僚の資格を重ねて持つ者である）を可能な限り押え込もうとすることだった。

第1次若槻内閣（26年1月30日成立）が、26年6月4日に「地方官官制改正令」（郡制廃止）を勅令で行ったことを見逃すべきでなかろう。同法は自治行政施行以来数十

年の訓練を経て、その技術と経験上に、地方自治体の議会・行政機関権限を改正（増強）した⁽¹⁶⁾。これには政党政治と地方自治を一層結びつける狙いがあった。朝鮮半島へ普選を普及させる以前の基礎作業になった。強いて言えば、閣内に7名の貴族院出身閣僚を抱えた第1次若槻内閣だったから却って、その過激な政策も、貴族院・枢密院採択を経られたのだった、と皮肉なことが可能であろう。政友会系内閣主導であったならば、手に余っただろう。

（7）安達謙蔵と朝鮮「宇垣 — 今井田体制」発足

第2次若槻内閣（31年4月14日成立）の下で安達謙蔵内相が任命した宇垣一成大將は、31年6月17日に朝鮮総督に就任した。次に19日に、今井田清徳・前逋信次官が、それを追いかける形で朝鮮政務総監に赴任した。林銑十郎が朝鮮軍司令官であった。1931年9月18日「満州事変」が勃発したが、その時点での「朝鮮問題」に関する日本政府トップ・スリーは、安達、宇垣、林だった、と指摘することが出来る。

前30年2月20日施行の第17回選挙（第2回普選）で、民政党は絶対多数（269）を獲得し、安達謙蔵内相は、「選挙の神様」扱いに祭り上げられた。

31年4月13日、浜口雄幸民政党内閣首相は右翼青年のテロ攻撃によって受けた傷を痛み、自分はもう議場へ通えないと訴える辞職願いを提出した。身体が必ずしも健康に恵まれていなかった浜口雄幸は、先んじて若槻礼次郎民政党顧問に対して、適当な時期に床次竹二郎君に総裁を譲りたいと告白し、一応の了解を得ていたといわれる。

31年4月14日、若槻礼次郎に第2次「貴族院内閣」政権の緊急継承が託された理由は、前々年29年10月24日にニューヨーク株式市場に発った世界金融恐慌へ対処する重視があった⁽¹⁷⁾。

床次竹二郎は、28年8月1日に民政党を脱党した。浜口内閣が成立した直後に、床次は、29年7月5日、「政友会・新党倶楽部」合同（「政・本合同」）の形で5年半ぶりに政友会に復帰した。その眼前で、犬養毅が、「護憲運動」で日本全国に大いに名を売って、10月12日に政友会第6代総裁に就任した。

ただし、この状況を別の側面から見直すならば、床次竹二郎は、政友本党で憲政・民政党を2年以上支えた実績を積み上げた上で政友会へ「出戻った」。犬養は32年2月20日「第18回選挙」に、政友会に303議席の大勝利を齎し、まるで安達の向こうを張るかの様に、これまたもう一人の「選挙の神様」の出現に崇められた。

ちなみに若槻、床次、浜口の若い頃の人間関係について調べると、1866年生まれの若槻礼次郎は、同年生まれの床次竹二郎の後で愛媛県に収税長として赴任した。1880年生まれの浜口雄幸は、浜口が山形県収税長の時に、床次が山形県書記官として浜口と対面した来歴があったと分かる。31年8月26日、浜口雄幸は死去した。

31年4月14日、第2次若槻憲政会内閣が成立した。逋信次官・今井田清徳を朝鮮総督府政務総監へ任用する人事は、安達謙蔵内相が次期総督候補であった宇垣一成の承

認を取り付けてから、次に原修二郎拓相の承認も合わせて取りつけ、その上で決定した。

それでも、前政務総監の伯爵・児玉秀雄は辞表提出をなかなか肯んじようとせず、安達内相は苦渋した上斎藤朝鮮総督も合せて辞職させる形を用いて、ようやく引導を渡したといわれる。安達謙蔵こそ、31年6月17日から始まる朝鮮「宇垣一成（総督）—今井田清徳（政務総監）」体制の設計者、生みの親である。

それ以前に安達謙蔵内相は、29年8月17日に第2次若槻内閣内相として、第2次斎藤実・朝鮮総督に斎藤実海軍大将を指名した。だが安達は、31年12月13日に、金解禁再禁止の犬養内閣の成立との同日を期して、民政党から脱党した。党内で孤立していた安達は、専ら井上準之助蔵相の引き降ろしにのみ精魂を使い果たしたのか？

さて、32年5月20日、政友会総裁に就任した鈴木喜三郎は、以前に303名（第18回総選挙32年2月20日施行の結果）の大政友会を率いる犬養内閣内相だったが、「腕の喜三郎」の異名で「5・15事件」後に政友会総裁ポストを手に入れた。

平山騏一郎（第2次山本内閣法相）は26年4月から枢密院副議長に就任した。若槻第2次内閣首相は、柳条湖の満州事変にうろたえたし、それへの緊急対応が必要になった時は、実力者の中で平沼を一番頼りにした、と客観的な歴史観察から納得ができる。反面、山本権兵衛伯爵、牧野伸顕・内府、清浦奎吾伯爵らは、若槻にとって頼りにならなかった。彼等は隠居の身に近く、現役で政局を操作できる力量がもう失われていると、若槻礼次郎は評価している。

牧野内府は、朝鮮半島問題に関する斎藤実総督の政治力量を絶賛した。子爵・斎藤実は、32年5月から34年7月まで内閣を組閣した。その後、35年12月26日に、9年半務めた牧野伸顕の後継者の内府（内大臣）に、斎藤は任じられた。

内大臣とは、天皇に奏上する諸情報を最終選択する宮中側機関である（行政職は宮内大臣）。露骨に言えば、それは陸軍部が帷幄上奏形式を用いる横暴に抵抗する最後の砦を意味した。だがその斎藤の在職期間は僅か2ヶ月余りであり、「2・26事件」の惨死で止まった。「2・26」惨劇で、36年3月、斎藤から湯浅倉平に内府が引き繋がれることで、一方日本政治の本流も大きく変わる。

3. 財部彪海相（浜口雄幸民政党内閣〈29年7月2日成立〉）の失脚

財部彪（たからべ・たけし）は岡田啓介と海兵卒期が同期である。浜口雄幸内閣は海軍軍令部の反対と枢密院の抵抗も排除して、ロンドン海軍軍縮条約調印に漕ぎ着けた。他方、30年2月に日本共産党第3次検挙があつて、起訴者が461名に及んだ。11月14日、浜口首相は愛国社社員・佐郷屋留男の襲撃を東京駅頭で受けた。

英都ロンドンで補助艦協定を対象にした軍縮会議が開かれて、30年4月22日に条

約が締結された。浜口内閣が派遣した日本全権代表主席は若槻礼次郎だった。他に随行者は、副主席が海軍大臣・財部彪大将，や駐英大使・松平恒雄等だった。

先んじて，3月14日，末次信正（中将）・軍令部次長は，同案は国防上日本の国益を損ねる，と発表し牽制策を講じていた。軍令部は同調印式の前日も，海軍省に対して条約調印に軍令部が猛反対である旨の通牒を重ねて届けていた。海軍のこの内訌に，東郷平八郎元帥，あるいは伏見宮博恭王大将も海相批判に乗り出した。

結果，山下源太郎大将，竹下勇大将，大角次官，左近司軍務局長，鈴木貫太郎軍令部長，野村吉三郎軍令部次長，山梨勝之進艦政本部長ら海軍主流が排除された。

「批准派（条約派）」の財部彪海相，堀悌吉（山本五十六と海兵同期）軍務局長も，「反対派（艦隊派）」も，次期総理も狙う加藤寛治（大将）軍令部長，末次信正軍令部次長らもが「喧嘩両成敗」でか海軍を追われた。

これより更に時を溯ると，関東大震災がまだ収まらなかった1923年9月2日，山本権兵衛・後備役海軍大将72才が第2次内閣を組閣したが，同内閣に司法相として平沼騏一郎が入閣した。陸軍大尉・甘粕正彦が社会主義者大杉栄夫妻とその甥を虐殺した事件が起きた。戒厳司令官が山梨半造に代った。続いて，23年12月27日，第2次山本権兵衛内閣期に「摂政官狙撃事件」（通称「虎ノ門事件」）が発生した。山本権兵衛首相は，何らの落ち度も無かったのに，権兵衛の責任感の強い性格がその内閣総辞職を思い切らせた。権兵衛は33年12月82才で世を去った。

「統帥権干犯」事件が収束した後で確実にいえたのは，伊東祐享元帥，井上良馨元帥が先に没し，34年5月東郷平八郎元帥も88才で逝き，「薩の海軍」の面影が帝国海軍からほぼ薄れた事情だった。財部彪は山本権兵衛の女婿である。財部は31年4月浜口内閣倒壊と共に軍事参議官に転じ，翌年予備役に編入された。

ところで，牧野内府が評価する斎藤実朝鮮総督の手腕は，実は山本権兵衛に象徴される薩海軍の威信が背景にあったといえる。ロンドン条約に関する「統帥権干犯問題」で財部海相以下薩海軍系が失墜する共に，朝鮮において「斎藤（総督）— 水野（政務総監）」体制も支えを失って行く。逆にそうであったから，あらためて斎藤実内閣（32年5月26日成立）が必要にされたのだったろう。

4. 先んずる田中義一政友会内閣（27年）と「（第2次）東方会議」の関係

田中義一内閣（27年4月20日成立）は，高橋是清蔵相，鈴木喜三郎内相，原嘉道法相らが顔を揃えて，いかにも政党内閣であるかにその外貌を装った。

水野錬太郎と鈴木喜三郎は，田中政友会総裁の勧めで政友会に同時期に入会した¹⁸）。約束通りに施行された28年2月20日の第1回「普選」に，924万票の処女票

が投入されたが、辛うじて政友会が形勢逆転し、政友会 219、民政党 217 だった。

田中内閣は内相に、検察畑で「腕の喜三郎」の異名を轟かせた鈴木喜三郎を補充した。だが、鈴木喜三郎は普選に、「議会议中心などとは英米流のものなので、我が国体とはあい容れない」と豪語した⁽¹⁹⁾。この発言はヒラの政党人などからは決して出て来まい。そこには貴族院議員意識が丸出しである。

田中派の直系の後継者には宇垣一成が見なされていた。田中陸相（第2次山本内閣）に宇垣次官がセットだった。田中義一は清浦貴族院内閣（24年1月7日成立）組閣に際して、福田雅太郎を退け、宇垣一成を後継陸相に推薦した。

しかしながら、宇垣は、「第3次軍縮」に着手したのだった。同・清浦内閣は、水野錬太郎が内相、勝田主計が蔵相だった。3人を「軍縮トリオ」にみなせる。ちなみに、阿部信行は宇垣陸相が浜口内閣で病氣療養した間に、陸相代理を務めた。

溯って、23年8月5日、男爵・加藤友三郎海軍大將が死去したし（同内閣に貴族院議員閣僚7人）、伯爵・山本権兵衛の第2次海軍内閣（同内閣に貴族院議員閣僚4人）は、「虎ノ門事件」で潰れ、次は枢密院議長・子爵・清浦奎吾内閣（同内閣に貴族院議員閣僚7人）樹立という具合に、垂「超然」内閣が引き続くと、政権が政党を素通りする俥にほったらかしているではないか、と高橋政友会総裁の政治指導力不足に対し、政友会党内部から憤りが渦巻いて、だからこそ24年1月29日に「政友本党」は、その怒りを分派行動にバネにした面があったのだった⁽²⁰⁾。

26年1月28日、加藤高明首相が急逝し、30日第1次若槻内閣に代った。田中義一陸軍大將は、同内閣の推薦で貴族院議員に勅撰された。政党総裁に議席が無いのはオカシイだろうと理由付けされたのがきっかけだったが、よく考えれば田中は衆議院に議席を持っているのが、本来はスジだったろう。なお田中男爵への総裁決定は選挙によらずに推薦の形を取った。ちなみに田中大將には、300万円陸軍機密資金持ち込みという噂もあった。

26年4月25日朝鮮李垕王殿下が宿アの腎臓病で京城（ソウル）・昌徳宮で薨去して、6月、ソウル（京城）で葬儀が執り行われた。葬儀委員長は湯浅倉平であった。湯浅は、25年12月3日から27年12月23日まで、第1期斉藤朝鮮総督の下で、有吉忠一（22年6月—24年7月）、下岡忠治（24年7月—25年12月）から引き継ぎ朝鮮政務総監に任じた。

政友会第5代総裁に25年4月13日に就任した田中義一は、27年4月20日に組閣した。その時与党政友会は466の衆院議席総数中159に過ぎなかった。そうであったから、年末の第54回議会後の解散は必至であると見られた。

28年2月20日に施行の第16回総選挙（それは第2回普選である）でも、政友会は与党とはいえ2票差で過半数を割り込んでいた。ところが28年11月時点に、新党

倶楽部と合同すれば、政友会は233の過半数議席の獲得も可能であった。

12月第56回議会は、政友会222，民政党172，第1控室会35，新党倶楽部27だった。すなわち、新党倶楽部が「キャスティング・ボート」を握っていた事が一目瞭然である。

翌29年3月18日、田中首相は牧野伸顯内府（内大臣）と会談した。牧野内府に對面する田中は「小選挙区制復歸」を要求しつつ、床次竹二郎の入閣も含める「新党倶楽部」との連繫（「協力内閣」工作）に内府の理解を求めた。

矢田七太郎上海総領事から報告を受けると、前28年11月24日、田中義一外相（首相兼摂）は、吉田茂（ちなみに戦後、第3代総理に任）外務次官と、滯洛中の森恪政務官に長距離電話で打ち合わせをさせ、宋子文と関税交渉以外は済南撤兵の時期を含めるすべての日中交渉を打ち切る、と矢田から国民政府外交部長・王正廷へ通告した。

その日中外交停頓の根本原因を、「中外商業新報」は、「日・中『満蒙問題』がそこにある」、「他の諸懸案のごときは直ちにも解決し去らるべきことは疑う余地が無い」と報じた。

先に、（28年）8月9日、田中義一外務大臣（首相）から内田康哉全権のパリ「不戦条約」締結に関する訓令中に、田中は「満蒙政策」を簡潔に纏めた。すなわちいう。「満州は日本の外郭なり。同地の治乱興廃は日本朝鮮に影響し、我が国に對し重大なる関係あり。さりながら我々は満州国を保護国とし、もしくは領土的に侵略せんとする意志は寸毫も有せず」、と。一方「不戦条約」の中に in the name of their respective people（人民の名において）の語が挿入されていた事で田中義一は枢密院にこっぴどく咎められ、批准手続きの引き延ばしで大いに苦悩した。3度に亙った山東出兵の件、治安維持法改正へ緊急勅令を使用した件、1928年6月4日「満州某重大事件」（張作霖爆殺事件）等が重なって襲来した渦中に、29年7月2日田中内閣は潰れた。

内田康哉（うちだ・やすや）は、西園寺、原、高橋、加藤友三郎内閣時代に外相であった。内田は田中内閣では枢密顧問官をしている。その内田は、顧問官辞任を以って田中外交に抗議し、田中内閣に致命傷を与えた。ちなみに内田は、次の浜口内閣（29年7月2日成立）に、仙石貢に代って満鉄総裁に1年間任じたことによって急場を凌ぎ、仙石を推薦した元老・西園寺の名誉を救った。

尚、田中内閣が倒壊した翌月に、「不戦条約」批准は皮肉にも採択された。田中義一は尾羽打ち枯らして29年9月29日に死去した。その死は、2年余の野党生活に堪えていた浜口民主党の手に次期政権を委ねさせた。

5. 「（第2次）東方会議」にオブザーバー参加する水野錬太郎文相の周辺

上原勇作と田中義一は、上原参謀総長（第2次大隈内閣）と田中参謀次長という人間関係が基本に置かれる。ちなみに、その時宇垣一成は参本第1部長に任じた。

田中義一内閣（27年4月20日成立）は、27年6月2日に文相の三土忠造（みつち・ちゅうぞう）が転出し水野錬太郎に代った。それは宇垣朝鮮総督が就任した5日後だった。三土は体調不良の高橋是清を継いで蔵相に転じた。

後に、三土忠造は、斉藤内閣（32年5月26日成立）期に政友会総裁・鈴木喜三郎（32年5月20日に任）を介さず、高橋是清をその蔵相ポストに引き抜いている。

田中首相が拓務省を新設して拓相を兼摂した時期に、三土文相（田中内閣）及び三土鉄相（斉藤内閣）は、岡田内閣（高橋が藤井蔵相を引き継いだ）に到る迄、「高橋翁（あるいは代理の井上準之助）が主導する大蔵省」を守る路線を邁進した。その仕事は、三土から安達謙蔵へ、犬養内閣では鉄相の床次竹二郎に引き継がれた。三土、安達は「軍縮」を進める上で、「予算削減面から」切り込もうと奮闘する方法を編み出して残したのであった。

水野錬太郎は、田中内閣文相を辞任した時に、代りに勝田主計（しょうだ・かずえ）を閣内に後任として送り込んだ。水野から勝田主計への引継ぎも、陸軍費拡大論者に対する政治的反撃であった。

田中首相は、「（第2次）東方政策」（満蒙政策）を内閣の看板政策に採用し、27年6月27日から7月7日迄内外に大々的に報じる「（第2次）東方会議」を開催した。

しかしながら、この会議が歴史上有した真の意味は、現在に到るも未だ著しく不確定で、解釈上に大きな懸隔を残している。その理由は、あまたの歴史解釈が、朝鮮政治と連動させて理解しないからだ、と私は私見をここで主張する。

「地方自治法の希代の専門家」と認められた水野錬太郎は、高橋内閣（21年11月13日成立）期に19年8月12日に朝鮮に着任し、22年6月15日まで朝鮮政務総監を務めた。その間に、朝鮮半島で「斉藤－水野体制」を組んだ。

その水野文相は、田中内閣閣内で久原房之助の逋相入閣に猛然と反対した件を以って、翌28年5月25日に「優待問題」を枢密院に責められ、辞職をやむなくした（その間に斎藤実が枢密顧問官に任じる）。同文相の後継者は勝田主計だった。水野錬太郎文相は「東方会議」にオブザーバーとして出席している。その後、水野の中途辞職に付き合うかに、斎藤実・枢密院顧問官も解職された。

「（第2次）東方会議」では、朝鮮政治に比して関東州政治を圧倒的に優越させたい陸軍皇道派を相手に、水野錬太郎、斎藤実が対決した。「東方会議」は、森恪（もり・つとむ）・外務政務官が、田中義一首相の指示を受けて企画・構成を担当した会議であったが、他面でオブザーバー参加の2人、水野錬太郎文相と勝田主計（後継文相）の抵抗活動があった裏面へも、歴史探索のメスは鋭く深く入れられなければならない。水野は先に、寺内正毅内閣内相を務めたし、勝田も同内閣蔵相であった。その2人は、「関東州政治優先主義」に猛然と対抗して、「朝鮮政治優先主義」を掲げた。

森恪は、犬養内閣（31年12月13日成立）の書記官長を務めた。森恪書記官長は満州国中央銀行に、2,000万円借款を三井（有賀長文）・三菱（木村久寿弥太）両財閥から斡旋した。同援助に朝鮮銀行に仲介させる借款方式をとった⁽²¹⁾（高橋是清が蔵相）。この態度に、朝鮮銀行資金を用いて朝銀金貨によって満銀を合一吸収しようと謀る意図を覗かせている。勝田主計は寺内内閣蔵相へ入閣する以前に、大蔵次官と、15年12月～16年10月に朝鮮銀行総裁を務めていた。第64回議会が開かれる直前に、森恪は、鎌倉の海浜ホテルで実懇の鳩山一郎夫妻に見取られながら亡くなった。

田中義一首相は外相も兼務し、同「（第2次）東方会議」には、一方で外務省プロパの顔を重んじて出淵勝次外務事務次官を一応出席させていたが、その本音は、田中は、外務省を軽視していた。田中は、自分は外相兼務だから、森恪を介して山本条太郎・満鉄社長に直命し、張作霖と借款鉄道契約が結べる筈だと信じ、外務省を介さず直接交渉に挑戦した。

田中義一は青山の私邸に、「オラが弟」扱いに遇する蒋介石を頻繁に極秘に招き、秘密会談を重ねていた。蔣が率いる北伐軍が、張宗昌・韓復榘が代表になっている山東諸軍閥に活動妨害されない様に、山東出兵作戦を3度に亘って遂行した。田中義一と蒋介石は、関税改訂に関しても列強に先駆けて何度も話し合った（ただし、交渉成立時期は浜口内閣になる）。28年6月8日、国民革命軍が北京へ入城し、同軍を率いた蒋介石は、中国国民政府として十数年ぶりに国家統一を遂に成就することになった。

7月19日、国民政府は、日本政府に日華通商条約破棄を通告しに来た。他方7月下旬、アメリカ政府は他国に先駆ける形で、新中国統一政府と新関税条約を締結し、中国の関税自主権を承認した。

田中首相は「東方会議」の方向性を指導する上で、日本の国家政策綱領を、「中国本土に対する政策と、満蒙に対する政策を峻別する」という「2元主義」内容に定めた。

ところで、その案は、原敬が21年5月16日～5月25日に開催した「満鮮会議」（第1次東方会議）の基本を延長した上に有った、と推察されるものだった。

先の所謂「（第1次）東方会議」（原敬内閣期）を振り返ってみると、朝鮮総督・斉藤実が、大庭二郎・朝鮮軍司令官、山縣伊三郎・関東長官、河井操・関東軍司令官とワン・セットで出席していた事が分かる。一方第「（第2次）東方会議」に、斉藤実総督は武藤信義・関東軍司令官、児玉秀雄・関東長官と3人ワン・セットで出席している。

後者の時期に、27年6月10日に、田中内閣が「拓務省」を新設（拓相は田中首相が兼摂）し、しかしながらその身代わりに関東庁が消滅した。満・蒙行政における伝来的「3位1体」なる体制を（陸軍部に対して攻撃的に）解消した点が、前者の場合と大きく異なる。他方、陸軍側の「第2次東方会議」出席者は、畑英太郎次官、南次郎参謀次長、阿部信行軍務局長、武藤信義関東軍司令官ら宇垣・田中系幹部になっていたから、

田中大将に齒向える筈も無かった。

ところが、その後田中義一内閣は倒壊した（29年7月2日）。だけれども陸相引継ぎプロセスをその後に絞って点検してみると、宇垣・阿部（浜口内閣）→ 南次郎（第2次若槻内閣）、と田中閥が引き継いだので、田中が描いた「シナリオ」は一応達成であり続ける。

軍令関係は、参謀総長・金谷範三、次長・二宮重治（34年3月24日予備役）、教育総監・武藤信義、関東軍司令官・本庄繁（36年4月22日予備役）、朝鮮軍司令官が林銑十郎、台湾軍司令官が真崎甚三郎だったが、各将官達は皆、更迭・退役の対象に挙げられたので、明日か明後日の通告を戦々恐々として待った。再編を生き延びられた者は最年少（共に陸士第12期）の杉山元・陸軍次官と、小磯国昭・陸軍省軍務局長の2人だった。ちなみに宇垣は親友である同期の鈴木壮六参謀総長さえ断ち切った。ところが、実際の歴史は、「第2次東方会議」の枠組みは、しかしながら田中義一にさえまるで想定もつかなかったが、「熱河地方」という地勢的遠方外郭から壊れたのであった。

6. 水野文相（田中内閣）への「優渥事件」の構造

28年5月21日に発生した水野文相に関する所謂「優渥事件」は、単なる水野文相の辞任（後任は勝田主計）に留まらず、田中義一内閣の屋台骨を大きく揺るがせた。元・検事総長だった鈴木喜三郎が継承する政友会は、それによって田中義一が敷いた「2元路線」の軌道を却って鮮明化した⁽²²⁾。それまで政友会は25年2月に横田千之助が死去していたし⁽²³⁾、27年2月に野田卯太郎も死に、その前には25年4月に高橋是清が田中義一大将に総裁ポストを譲って、政治の一線から一旦退くかに態度を見せていた。

田中義一は天皇の婉曲な叱責を大いに気に病み、29年9月に衰弱死した。政友会内の絶対指導体制の空洞化時期と、水野文相の失脚は時期を一致している。その直前に、水野は政友会内で、鈴木喜三郎（田中内閣内相）、鳩山一郎（鈴木義弟）、森恪政務次官の「トリオ」の対抗馬に挙げられていた。その状況下に、田中は山口県萩の同郷である大実業家・久原房之助を更に政友会に引っ張り込んで、「トリオ」を「クアルテット」に一層強化しようとも図っていたようだったから、水野は田中の党政掌握の野心に猛反発していた。

28年2月に施行した日本初の「普通選挙」では、政友会は前回より+53議席を獲得したものの219議席で、これに対して民政党（憲政会+政友本党）は前回比-13議席だったが217議席を確保したので、政友会は議会過半数を占められなかった。

5月4日、鈴木内相（田中内閣）の辞任は、「トリオ」が崩れたかに見えたが、5月25日、水野の失脚で、反転して、党内イニシアチブは「トリオ」の手に戻った。

一方29年2月7日、新党倶楽部（民政党内の旧政友本党系院内会派）総裁の床次竹

二郎は田中義一首相に会見して、政友会への復帰を探った⁽²⁴⁾（7月5日復帰）。

7. 斎藤内閣の組閣と、元老・西園寺の「連帯責任」観への転換

25年12月3日、斎藤朝鮮総督は加藤高明（第2次内閣）首相の麹町の私邸を訪問して、「護憲3派による第1次加藤高明内閣を実現させた」下岡忠治の後任朝鮮総督府政務総監に、今迄に「普選実現」に尽力した湯浅倉平内務次官を当てたいし、一木枢府も湯浅を強く推している、と請願した。同日、湯浅の親任式が行われた。湯浅倉平は25年12月から27年12月迄、斎藤朝鮮総督の下で朝鮮政務総監に就任した。26年1月28日、加藤高明首相は急逝した。30日に第1次若槻内閣が後継した。

32年4月4日の、とある会合で、木戸・内大臣（牧野伸顕）秘書官長は、犬養内閣の後継者には斎藤実か平沼騏一郎・枢密院副議長が相応しいと考える、と提言している⁽²⁵⁾。5月21、22日、元老の西園寺は、清浦奎元首相、山元権兵衛元首相、上原元帥、東郷元帥、荒木陸相、大角海相を個別に自宅へ招き、どちらが次期首相に相応しいかに意見を聴取した。「5・15事件」の直後に、32年5月26日、斎藤実内閣が誕生した。西園寺公爵は今回の後継首班の選考では明らかに、「大権事項」を尊重して、「憲政の常道」は放棄しよう、と判断した⁽²⁶⁾。倉富勇三郎枢府も、「（次期首相を）総理大臣が選択して上奏する」ゆえ「大臣の統一が出来ざるは、人選適当ならざりしとの責を負うものに非ざるべきや」と、世論の過半を占める「内閣連帯責任論」を支持した⁽²⁷⁾。

宰相を交互に対抗政党から選出する政治システムが、この時点で崩されたことを確認する。

安達謙蔵内相（第2次若槻内閣に留任）は、政友会総務・森恪、同幹事長・久原房之助を相手に、「挙国一致内閣」作りを交渉した⁽²⁸⁾。その時安達は、後継内閣の首相に、平沼騏一郎を当てにしていた。

35年5月9日、政友会総裁・鈴木喜三郎は、政友会が岡田海軍大将の内閣（34年7月8日成立）に党として参加することを正式に拒絶した。にもかかわらず床次（犬養内閣鉄相）は逡相に、内田信也が鉄相に、山崎達之輔が農林相に個人資格で入閣した。

尚、望月圭介（田中内閣内相）は「内閣審議会」に参加した。彼等4人は鈴木総裁によって政友会除名を言い渡される結末になる。

岡田内閣は、町田忠治民政党総裁が商工相、高橋是清が蔵相、児玉秀雄が拓相、床次が逡相になる。床次竹二郎は35年9月8日に急逝した。川島義之陸相（林銑十郎から代わる）では政治力が弱体で、岡田内閣の陸相は、陸軍を纏める能力に著しく欠けた。

8. 斎藤実内閣から岡田啓介内閣へ到る政治構造の変化

齊藤内閣「大型膨張予算」は、34年度予算に21億4,252万8千円という日本国歳計史上未曾有の最高金額になり、これに伴って赤字公債もまた6億3,295万5千円になった。「財政非常時」といわざるを得ない⁽²⁹⁾。農村救済費が徹底的に削減され軍事費が4割7分を占めて高橋財政を食い潰したので、後藤文夫農商相は暗涙を絞った。齊藤内閣では、「行政委任立法」がやたらに増え、行政機関の立法機関に対する優位化を図った。

齊藤内閣は実体が「貴族院＝官僚内閣」だったと見られる。齊藤実は、次官8年、海相8年、朝鮮総督8年を経験し、山本権兵衛の無類の女房役を務めて来た。森恪・政友会幹事長は犬養毅首相が「5・15」事件に倒れると、平沼枢密院副議長を次の内閣首班に推そうと迷ったが — それについては小磯陸軍次官の同調が既に得られていた —、一木喜三郎宮相、湯浅倉平（会計検査院長）が推す齊藤子爵に候補を譲った。一木と湯浅は、牧野伸顯内府を通じて、西園寺公から齊藤実を後継首相に奏上した。床次、内田信也、山崎達之輔も齊藤実を推したことはもち論だった。

ところで、後藤新平（第2次山本内閣内相）と齊藤実は1才違いで（後藤が1857年生まれで1才年上である）、2人は共に少年時代に岩手県肝沢村塩釜（後藤）と水沢（齊藤）の近隣で育ち、奇しくも同じ地域青少年指導者が世に引き上げた奇縁があった。後藤新平は児玉総督の下で、1898年に台湾民政局長に任じ、1908年まで8年半を台湾に駐在した。齊藤は立憲民政党時代に、再び朝鮮総督に任じた。

32年5月20日 —それは「5・15事件」の5日後である— の政友会臨時大会で、内相（犬養内閣）・鈴木喜三郎が、満場一致で、次期政友会総裁に選出された。一方対立候補に見られていた鉄相・床次竹二郎は、立候補を辞退した。床次竹二郎は、先に田中内閣の時代に、田中内閣を打倒せよとまでは正面切って発言しなかったけれども、田中に相当な痛手を与えようと「民政党」結党に加わった経歴が、世間に忘れられず十分記憶されていた⁽³⁰⁾。一木、湯浅から牧野内大臣へ上げられる、齊藤実を首相に推薦する声には、鈴木貫太郎侍従長との組み合わせが良い、とも添え書きが付けられていた。

木戸幸一・内大臣秘書室長、財部・元海相、有吉忠一貴族院議員、三土忠造・犬養内閣通相らが支援活動を積極的に進めた。32年5月21日と22日、元老・西園寺は、清浦奎吾（元首相）、山本権兵衛（元首相）、上原勇作陸軍元帥、東郷平八郎海軍元帥、荒木陸相（犬養内閣）、大角海相（犬養内閣）の面々を個別に私邸に招き、齊藤実に海軍内閣を組閣させる算段を、303議席政友会を敵に回してでもやろうと打ち明けた。

齊藤実内閣（32年5月26日成立）は目玉政策に、選挙制度改正を挙げ、公平化につき「法制審議会」を設ける「文官分限令」の制定を挙げた。しかも、貴族院系大官僚を取り締まるその最高統括権を、平沼騏一郎・枢密院副議長に委ねた⁽³¹⁾。

犬養内閣が閣内に、衆議院に議席を有する純粹の党人閣僚が10人だった例に比べる

と、斉藤内閣では僅か3人に減った。貴族院閣僚6名を擁する。貴族院議員水野錬太郎の内相就任は取り消された。その点が先行の加藤友三郎、清浦両内閣と大きな違いになっている。斉藤が水野を後継にしようとしたシナリオは、その芽を摘まれた。

内相に、民政党長老（原・高橋内閣農商相に任）である貴族院議員・男爵・山本達雄が任じた。貴族院議員・男爵・後藤文夫が農林相に任じ、山本達雄の助言者として入閣している。蔵相に高橋是清が任じた。陸相に、犬養内閣から留任する扱いが極めて厄介であった荒木中将が就任し、拓相に永井柳太郎・民政党幹事長が任じた。

ここから、政友会による支持をひたすら頼みにする第1山本権兵衛内閣（13年2月20日成立）に戻ると、山本首相も斎藤実海相も、「シーメンス事件」に結局何も関係しなかったとは歴史が明らかにしたが、山本権兵衛首相（第1次山本内閣）に連座する形で、斎藤実は1928年5月、58才で予備役になっている。しかし、斎藤実はその後軍籍を現役に戻し、計12年間（19年8月－31年6月に、ただし、宇垣総督臨時代理期、及び山梨半造総督期を中間に挟む）に互って朝鮮総督を務め上げた。

33年12月に山本権兵衛が亡くなった。陸軍からの反発の矢面に晒される斉藤内閣は、その前年の32年5月26日に成立していたが、斉藤内閣は、その面前に、（1）満州国承認及び「日・満議定書」（32年9月15日）の締結、（2）国際連盟から脱退（33年3月27日）、という、まず2つ難題を迎えた。

更にもう1つ、斉藤・岡田内閣期を通じて重大な制度変化が起こった問題が見逃せない。それは、（3）満州国に関する外務省の本来の外交権を陸軍が制限し、ひいては陸軍にそれが横取りされた事態である。陸軍（荒木、林、川島が歴代陸相に任）は、斎藤実・岡田啓介の両内閣期を通じて、対「満州国」外交を「軍部による1元外交」へ収斂しようとしたのだ。当時の参謀次長が誰だったのか？を是非知りたいが、そこに、総長閑院宮の蔭にいた、植田、杉山元の名が見つかる。

34年8月6日、岡田啓介内閣期に、陸軍省が「在満機関改組原案」を発表した。一方藤井真信蔵相の財政方針は「公債漸減」政策であった。10月2日、藤井蔵相は西園寺公望公を訪ねて、陸軍費増額が関東軍の火遊びの拡大に繋がりはしまいかと懸念する心情を吐露した。11月7日、藤井真信蔵相は林銑十郎陸相と大角岑生海相を相手にして、予算復活要求削減を要請した。ところが、11日に藤井蔵相は病気入院する。しかも翌日、遂に藤井は辞職した。藤井蔵相は軍事費4割削減を目指していた。代って、高橋是清が「2・26事件」の発生まで蔵相を務めた。高橋翁の財政政策は、「公債消化力の強化」政策である。

そのインフレ政策はたまたま好況を齎したから、経済界の評判も上々に上がった⁽³²⁾。それは、経済市場を暫時拡大して切り抜ける策で、高橋は一時妥協姿勢を見せたのだったが、それでも高橋は軍事費削減にやはり大鉈を振るおうと企てていたから、藤井とさして変わらないことはいずれバレてしまった。「2・26事件」生起が必然になる。

ちなみに、床次竹二郎通相が岡田内閣期に「内閣審議会」の設立に関った（35年5月）が、同会の発足当時の副会長は藤井蔵相だった。斉藤実・前首相、山本達雄・前内相、政友会系貴族院議員として水野錬太郎もその委員である。

斎藤実・挙国一致内閣（32年5月26日—34年7月8日）は、議会最大多数派の政友会（300議席）ではなく、高橋是清蔵相と山本達雄内相の2人に求心力を求めた。

ところで、斉藤実は、岡田啓介海軍大将を大いに目をかけて期待していた。岡田啓介が65才の定年に達した時に、岡田の現役延長を斉藤は東郷元帥に申し込んでいる。岡田は、「悪例を残しては良くない」と退任を自分から申し込んでその措置を沙汰止みにした。

岡田内閣（34年7月8日成立）が成立する前日に当たる34年7月7日に、先の斉藤内閣の閣僚ポスト配分に遺恨を抱いている（後出）鈴木喜三郎・政友会総裁（32年5月20日就任）は、「岡田内閣は官僚内閣で政局担当能力無し、よって政友会は一切協力しない」、と世間に公言して一向に憚らなかった。岡田内閣に入閣した床次、内田、山崎らが、鈴木喜三郎に除名されたことは前言した。

政友会は、「重臣会議」にすら出席しようとしなかった。

岡田首相は、これは先にも論じたものだが、床次竹二郎を岡田内閣通相に、山崎達之輔を農林相に、内田信也を鉄相に、閣内に招じ入れて大歓待した。床次竹二郎は岡田内閣通相だった35年9月8日に、任期途中で急死した。

「挙国一致」を掲げる子爵斉藤実の組閣から6日後に、鈴木喜三郎が政友会総裁に就任した。ちなみに鈴木喜三郎は、床次竹二郎が原敬内閣内相だった頃、まだ司法省次官の若輩の一人の存在に過ぎなかったのだった。

鈴木喜三郎は、303議席の党勢維持に汲汲としていた観があったのである。大政友会が単独で第3次護憲運動を興して政権が取れる日を、鈴木喜三郎は日本政治の近い将来に夢に見た。「貴族院・枢密院勢力」をよしんば敵に回そうとも、大政友会の大所帯でなら、さして影響はないだろう、と鈴木は信じた、と想像できる。

斉藤内閣、岡田内閣は、共に母体が民政党になっている。鈴木は、だから斉藤・岡田に政治実績を上げさせてはならなかった。民政党が失点を犯す事が望まれた。確実な保証に、鈴木総裁は、民政党との政治戦の武器に、「天皇機関説」批判を媒介とする「国体問題」という禁じ手を使用しても躊躇わなかった、とあらためて検証されよう。

事情がそうならば、厄介な軍部方面は政友会の敵に一向にならないし、摩擦は専ら、民政党と軍部間に引き起こせると予想ができた。鈴木喜三郎は歴史の肝心な分岐路に立って、このようにして「国益」より「党益」を優先した。

さて、現地において「発火」は、軍部の企みがほとんど無い「熱河」地方で起こった

のであったから、日本内地の政界では、大陸のその遠隔地点に発した地殻変動の内容が、特に事前には、丸で見抜けなかった。

32年5月に斉藤首相が組閣した頃へまた再び振り返れば、303議席を占有する政友会に対して4、民政党の144議席に3の比率で、それぞれに閣僚ポストが用意された。その一方で斉藤首相は、民政党員の山本達雄（しかし山本は原、高橋政友会内閣農商相に任）を内相に就け、山本を副総理格で遇した。高橋蔵相は、党籍こそ政友会に置いても、その精神はいかに政友会員といえず、三土鉄相は高橋翁の「連れ子」に見なして良かった。南弘逋相は政友系であったが黨員でなかったし、非・鈴木系だった。

民政党枠では、永井柳太郎拓相と男爵・後藤文夫農林相（次期岡田内閣内相に任ずる）が、斉藤内閣の黒幕の伊沢多喜夫の紛れもない代理人だった。したがって鈴木・政友会総裁の身代わりは、居残り文相・鳩山一郎（鈴木の義弟）が一人だけでいた。

「貴族院の民政党官僚群に君臨するドン」こと伊沢多喜夫は、平沼騏一郎を著しく毛嫌いしていたので、森恪・政友会幹事長すらも、平沼を政敵だと放言して厭わなかった。

斉藤内閣の構造は、衆議院に政友会が303議席を占めていたにもかかわらず、「民政党・貴族院」連合政権に分類される状態が出来上がっていた。

伊沢直系の内務官僚である山本達雄の同郷の後輩で、これも伊沢系の男爵・後藤文夫が、次の岡田政権には、山本達雄から内相を引き継いだ。

斉藤首相は第63回議会（32年8月23日開会）だけは何はともあれ通させて欲しいと、屏風裏交渉で、森恪に、それは「ラトビア国」公館を利用する2人だけの秘密の朝食会の席だったが、何度も頭を下げつつ頼み込んだ⁽³³⁾。森恪は、だが実は平沼騏一郎か、宇垣を擁する政友会の単独政権を、斉藤内閣の次期内閣に想定しもしていた。森恪は、しかしながら、同32年12月11日 — それは第64回議会直前である —、鎌倉の海浜ホテルで急死した。

一方では安達謙蔵は、32年11月に、— それは斉藤内閣期にである — 民政党を脱党している。

岡田首相（34年7月8日に就任）は政友会に3、もう片方で議席数が政友会より半分を遥かに下回っていたにもかかわらず、民政党にも3の、誰が見ても「平等ではない」閣僚ポスト配分を提示したし、しかも内相に後藤文夫を据えた。

ところで、前・斉藤内閣は（日本内地の）国政運営に実力が甚だ乏しく、「5相会議」（陸相は荒木）にそれを委ねてしまっていた。その実体は、政治主導権を、荒木中將が主催する「内政会議」が握った。次の岡田内閣の「内閣審議会」委員に、7月8日に、水野錬太郎、望月圭介、山崎達之輔らが就任したが、その3人は鈴木総裁に政友会から除名された（再言）。

ところがこのような、闇雲な除名連発は、返す刀で、鈴木・政友会の政治勢力をも失速させた。その果てに、35年5月22日、民政党（町田忠治総裁）が政友会との提携解消を通告する。

9. 李王垠 — 純宗薨去と朝鮮「6・10独立要求運動」の生起

大韓帝国初代皇帝を名乗った李太王「高宗」は朝鮮王朝第26代王であり、在位は1863年～1907年だった。名は載晃、いみなは「李・ki」である。

朝鮮第27代王の「純宗」（李 seki）は高宗（李太王）の長男に生まれ、在位は1907年～1910年だった。母親は明成皇后すなわち闵妃である。純宗はソウル（京城）景福離宮である昌徳宮に16年間住まい、純明皇后・闵氏（病死）と純貞皇后・Yun氏という2人の妻を娶ったが、跡継ぎの子を得られなかった⁽³⁴⁾。

高宗の7男で貴妃・嚴氏が母親の英親王は、純宗の異母弟として1897年に生まれた。1907年に皇太子（王世嗣）に冊礼（冊封）されると、英親王は翌08年12月から留学名目で渡日し、以後日本で教育を受けて暮らすようになった。この行動は伊藤博文・韓国統監が考え出した訓育政策に従ったのだった。しかし朝鮮社会の目からそれを見れば、これは英親王が日本政府に人質に取られたのだと写る。1910年に「日韓合邦」で純宗は廃位され、英親王は日本の准皇族の資格を得て、「李王垠（りおう・うん）」と呼ばれることになった。李王垠は、日本で陸軍士官学校に入学し、陸軍中將への道を進んだ。

久邇宮朝彦（くにのみや・あさひこ）王の第4王子である守正（もりまさ）王は梨本宮（なしもとのみや）家3代目（初代は伏見宮守脩〈ふしみのみや・もりおさ〉親王である）を継承した。

守正王は1923年に陸軍大将に上り、32年に元帥に昇格した。

李王垠は、1920年4月28日、この梨本宮守正王の第1王女である方子（まさこ）女王と嘉礼の宴（結婚式）を挙げた。ちなみに方子はそれ迄に、裕仁皇太子の有力な妃候補である3人の候補者の内の1人だったとも言い添えておく。

李王垠と方子の婚約はそもそも19年1月25日に定まっていたのだったが、ところが、その予定日の3日前の1月22日に、李太王がソウル（京城）で、67才で急死した。その理由への配慮があって、挙式は引き延ばしされていた。

方子は自分が李王垠と婚約した事実を、ある日新聞を眺めていて偶然その記事を読み知ったのだった、と、後に自伝の『流れるままに』の中で告白している。一方相手方の李王垠の方も、朝鮮王朝最後の王であった父親の高宗が、李王垠のために150人余りの后候補者の中から自分が選り選った、闵甲完という名前の許婚の存在があった。

李太王（高宗）の葬儀（因山：国葬）は、19年3月1日だった。この日に「3・1

万歳独立運動」が重なって起こっている。

高宗の死亡については、日本側が宮医の韓相鶴を唆して毒殺させたのではないかという噂が巷に撒かれていた⁽³⁵⁾。天道教、キリスト教、仏教等各宗教団体が、ナショナリズムの意識を基盤にして結束したことが、この民族運動の高まりの基盤にあった⁽³⁶⁾。しかし反面、この運動は、朝鮮半島において、宗教組織の広範な活動が事前に許されていた状況も反映している。朝鮮軍司令官は宇都宮太郎中将であり、軍歴は駐英大使館付き武官勤務でそれ迄に出征経験が無く、将来大将昇格確実の候補者が、治安が頗る安定していると認定される同地に派遣されて来ていた。

22年4月、李王垠と方子は、生後8ヶ月になる長男の晋を連れて、初めて家族で朝鮮に里帰りした。2人は李王垠の兄の純宗と妻のYun妃に結婚を報告した。ところがその滞在の最終日だった5月8日の夜、晋は、消化不良という見立てになる激しい引き付けを起こして、11日に急死した。

その状況を調査すると、李王垠一家はその滞在中、朝鮮王家のしきたりに従って、母親である方子の手から晋を引き離し、朝鮮人宮女たちに晋を完全介護させて、晋を隔離させていたのだった。

李王垠の第1王子である晋がこの様にして夭折してから、第2王子が産まれるまで、それから10年間の月日が流れた。1931年に生まれた第2男子は、玖（Gun）と名付けられた。

26年4月25日、純宗がソウル（京城）の昌徳宮で53才で宿アの腎臓病で薨去し、朝鮮王朝最後のこの王の葬儀が、朝鮮の「6・10独立要求運動」に繋がった。他方12月25日、風邪を拗らせて大正天皇が気管支炎で47才で薨去すると、摂政であった迪宮裕仁皇太子が、皇位を継承して、昭和時代が幕を開ける。

10. 「陸軍パンフレット」問題と満州国興安総省官制の改訂

33年2月10日、拝謁した閑院宮載仁参謀総長に対して、天皇は親族への親しみを訴えかけるかの調子で、（斉藤内閣が）十分承知出来ていないから、（第1次）「熱河作戦」は中止できないだろうか？と話し掛けた。

2月11日、斉藤実首相は熱河作戦を何卒中止して戴きたい、と奏上したが、陸軍（荒木貞夫陸相、真崎甚三郎参謀総長）は、「一度御裁可を得ている」、と斉藤首相に激しく突っかって反論した⁽³⁷⁾。

2月17日、武藤信義関東軍司令官が「（第1次）熱河作戦」を発令した。陸軍の主張に反対する牧野内府と一木宮相は、その不満表明の手段として自分達の辞職を内奏した。牧野の願いは聞き届けられず、一木宮相（25年3月30日任）の方は、平沼騏一

郎枢密院議長にではなく、湯浅倉平と代えられる（湯浅は33年2月14日に宮相に任）。

それ迄に湯浅の経歴は第1次加藤高明内閣内務次官に任じ、25年12月3日～27年12月23日、斉藤総督の下で、湯浅は朝鮮政務総監に任じていた。

ちなみに伊藤之雄は上の一件を、「元老西園寺は、何とか宮中の側近集団を守った」と描いたが⁽³⁸⁾、もし「朝鮮人脈を残して」をその前に挿入するなら、解釈はなおさら深くなるだろうと私は提言したいのである。その目的は「朝鮮全道自治選挙」の実施を継続させる保証を求めた、と解することが可能であろう。

「2・26事件」で斉藤内府が殺されると、湯浅倉平が36年3月6日から斉藤の同内府職を引き継いだ。湯浅は、40年6月1日迄その内府の地位にいる。木戸幸一がそれを継いだ。

35年2月、岡田啓介内閣期の第65回議会に起こった「天皇機関説違法問題」は、貴族院議員美濃部達吉博士を狙ったかに表面は装っていたが、真の標的は一木枢密院議長であったと推測したい。

前34年10月1日、陸軍新聞班は一介の陸軍下位機関の職分でありながら、「国防の本義と其の強化の提唱」と表題するパンフレットを頒布し世に問う（林銑十郎が陸相）。

ただし、林陸相の陸軍統制力不足を非難しても話は始まるまい。むしろ当時の参謀次長が誰だったのか？是非知ろう。それは杉山元だった。

そのパンフレット発表行為に隠されていた政治的意味は、32年7月（斉藤内閣）の「3位1体」を破壊する「予告」だったのであり、34年12月26日の「対満事務局」設立の「宣言」に繋がる。「対満事務局」の設立は、関東庁の同時廃止を指す。ちなみに「対満事務局」の総裁は、その後すべて陸相兼任になったのであった。

34年12月1日頃、満州国は満州国総理・鄭孝胥の名で満州国省公署官制を改正（変更）し、興安総署の下に蒙政部4省が専属帰属する形になった。それは、今後、内蒙古に、（日露戦争後の日露協定が取り決めた）「東半分」以外にも、「第2の満州国」が誕生する可能性を予兆させるのであった。その場合、内蒙古行政のイニシアチブは満州国中央機構から離れるとか、内蒙古王連合に、興安総署の権限を譲る解釈を生む、各自立化（4者〈内蒙・満・中・日〉間）を多様化させる余地が生じた。

そうなれば、端的に「内蒙古（独立）連合政府」樹立も夢でない。そして現実上に、そのシナリオは日華事変の後で、「蒙古連盟政府」（10月綏遠を回復し、37年に樹立）や「蒙古連合政府」（39年9月、綏遠を厚和〈フフホト〉に改称し、フフホトを首都に制定し39年9月に樹立した。主席は雲王、副主席は徳王テムチュクトンルプ）として実現した。

一方中華民国側は対抗的に、内蒙古地方には「盟」の論理でなく、当然「省」論理を用いる。ともあれ「熱河省」経済は、華北経済圏の中にそもそも組み込まれていた。

35年3月23日、ソ連のユレネフ駐日大使と満州国の丁士源駐日公使が、内田外康哉外相の斡旋の下で東京で、1,700余kmの「中東鉄路（北鉄）譲売協定」に調印した⁽³⁹⁾。

11. 小結 — 平沼騏一郎枢密院副議長の隠然たる存在感の発揚と、平沼枢府の対朝鮮政策に関する「奇策」

斉藤実第3代朝鮮総督（第1期は、19年8月12日に任）は、故・副島種臣（伯）の息子である副島道正を朝鮮総督府機関紙「京城（ソウル）日報」の編集者に招聘した。副島は同機関紙上で「朝鮮自治州」構想を大々的にキャンペーンした。副島の主張は、要約すると次の2項に絞られる。

- (1) 「朝鮮人同化論」は不可能であり、無益である。
- (2) 朝鮮での「自治選挙」の施行によって、自治に関する政治技術を朝鮮全道に普及させ、自治技術のレベルの成熟を「面」から「道」へ次第に引き上げる。

自治技術の向上として、朝鮮社会の両班時代が培った被支配社会層の奴隷意識を排除し、市民社会意識を陶冶し、「自治選挙」から移行し「普通選挙」施行への政治基盤を形成することが、目指す目標である、と副島は説いた。副島道正は、当然原敬の構想に土台として思いを馳せていたことだろう。

やがては首相の座に到達する原敬は、まず朝鮮半島に「自治選挙」を実施させてから、ひいてはその延長上に、2,000万人の朝鮮人の代表である100人以上の衆議院議員を、日本本土の議会内にやがて迎える構想を抱いていた。原はそして、仮りに日本政府がその政策選択を避けようとする場合に、朝鮮に、「自治」から「独立」へ進む道を、必ずや開かなければならない、とも想定していたのだった。

一面原敬は、日本政府の財政負担を考慮し、むしろ後者の選択の賢明さを優勢に考えたのだったろうか？時期的制約によって、原はその究極判断までは言及しなかった。水野錬太郎政務総監が「地方自治法専門家」として、原の思想に賛同し、その意に沿って朝鮮半島で実際活動した。

斉藤実朝鮮総督と水野錬太郎政務総監は、日本本土と朝鮮の双方の地で、自治強化の以上の方針を、就任した初期から「朝鮮総督府施政方針」と銘打って発表している。

「朝鮮官制」は「大権事項」に属するから、内閣総理大臣が天皇に上奏すれば（その前に総理大臣は主管の内務大臣に当然諮問している）、内閣が国会審議を経ずに、決定出来る。ただし、実際には枢密院の批准が伴わなければならないのが事実だった。

ところが、「地方制度改革」分野だったならば、特別に劇的な予算増加措置を伴わなければ、枢密院の介入も衆議院の筆頭政党優勢の前に、自ずと遮られて退いた。

元・検事総長、そして元・大審院長として、平沼騏一郎は、第2次山本権兵衛内閣の時に、犬養遯相が提案した「普選」案に真っ先に賛成した政治重鎮の筆頭だった事を、尾崎行雄は世間に度々想起させている⁽⁴⁰⁾。また平沼は、30年4月のロンドン海軍軍縮条約についても、枢密顧問官として「賛成」し、「立場転換」を鮮明に示した。平沼の性格規定に、これらのエピソードを心に留めて置くべきである。26年4月12日から（第1次若槻内閣）、枢密院は、倉富勇三郎議長と平沼騏一郎副議長の体制になった。

29年8月17日、斎藤実は、再び総督として朝鮮半島に戻って来た。斎藤が最重要政策に掲げるのは、朝鮮の13「道」（県に相当する）会、21「府」（市に相当する）会、114「邑」（村に相当を邑・面制に改正し、邑長の行政権を強める）会を「審議・諮問機関」から「議決機関」に変える事業であった。30年12月、朝鮮地方制度大改正を施行した。朝鮮地方自治権の拡大に着手したのだった。

第1回「朝鮮全道道会選挙」は、1933年5月10日だった（ちなみに宇垣朝鮮総督期、斎藤内閣、山本達雄内相、永井柳太郎拓相）。朝鮮総督府が、それを朝鮮の全道規模で施行した。朝鮮人の議員当選者は42人、内地人当選者は241人だった。山本達雄と永井柳太郎の2人の民政党幹部が「責任者」だった。府会議員選挙の方は、31年5月21日に施行された。朝鮮人157人、内地人257人が当選した。斎藤朝鮮総督と水野錬太郎政務総監は、自治政治の第一歩として「選挙熱」を朝鮮半島にまず植え付ける計画に取り組んだ。

同時に斎藤と水野の2人は、朝鮮の「地方自治法」をも着々と改正・整備しようと計画した。そしてその活動の中核に「全道自治選挙」を施行したのだった。朝鮮総督府は、軍部と貴族院・枢密院双方から浴びる圧力を撥ね付けた。ただし、両種の自治選挙には制限選挙制を採用した。その意図は、朝鮮半島内部から「普選要求」の声が自発的に上がって来ない限りは、「普選」は到底根付かない、と考えていた。

原敬、斎藤実の対朝鮮政策について、更に特徴のもう一面を、私はここで検討したい。朝鮮総督府は1925年（渡航制限実施）から43年頃まで、朝鮮人から日本本土への求職希望が高かったにもかかわらず、朝鮮人労働力の日本本土移転（朝鮮人の日本への移住）は厳しく制限し続けた。朝鮮総督府は、朝鮮人労働力を朝鮮半島域内の復興、振興目的に限って使用するべきだという信念を原則上貫いた。しかしながら、その考え方の底意には、内地の労働賃金が引き下がる心配もさる事ながら、朝鮮人が通常雇用状況で日本に居住することになれば、普通選挙権も即座に、一気に彼等に与えなければならない、という政治問題の重大性への懸念があったとも、穿って推測できる。

第2回道会「朝鮮自治選挙」は、37年5月10日に施行された。林銑十郎内閣期であった（ちなみに内相は河原田稼吉、逋相に児玉秀雄）。これに関して、36年3月1

3日、平沼騏一郎が、枢密院副議長から議長（枢府）に昇進したことに留意すべきである。平沼は朝鮮政策に関する国権の最高意思決定機関を握る立場に到達した。

それから平沼は、39年1月5日に、自らで平沼内閣も組閣し、自分が今迄務めて来た枢密院議長（枢府）のポストを平沼内閣の前に第1次近衛政権を終えたばかりだった近衛文麿に譲った。その近衛は、その後40年6月24日迄同職にいた。尚、その間に平沼騏一郎内閣、阿部信行内閣、及び米内光政内閣が組閣された。

米内内閣後は、40年7月22日～41年10月18日迄、第2次近衛内閣（平沼国務相、内相）、第3次近衛内閣（平沼国務相）が継承した。つまり、平沼は第3次内閣迄、国権の遂行に関する政策決定機関上で、近衛と共に実質最高意思決定者であり続けた。

第3回道会「朝鮮自治選挙」は、1941年5月10日に施行された。それは第2次近衛内閣期に当たっている。内相は、同閣内国務相から転じた平沼騏一郎だった。

つまり朝鮮全道自治第2回選挙と第3回選挙を、平沼騏一郎枢府、あるいは平沼内相が取り仕切っていた。「自治選挙」貫徹によって関東軍の介入は朝鮮半島から遮断されている。以上は、枢密院権力を巧みに用いる、平沼のとおき「奇策」だったろう。

平沼のその絶大実権の下では、陸軍から発されるいかなる干渉も排除され、朝鮮に選挙制度が定着した。その間、朝鮮軍の治安出動に関しては、朝鮮総督の許可無しに発動されないという制度も慣行化された。朝鮮総督は、よしんば隣の関東軍司令官（梅津美治郎が39年9月7日に任）から国家安全保障上の協力的出撃要請があった場合にも、拒否権を行使できる立場が公示され続けていた。

28年12月13日、平沼騏一郎は松本剛吉貴族院議員に対して、「満州某重大事件」の真相をブチ撒けたが、それが田中内閣潰しに繋がった⁽⁴¹⁾。先に7月1日、床次は元老西園寺に面会し、元老・西園寺から同件の実相を知らされている。その前には5月29日、平沼男爵（枢密院副議長）が田中首相は不謹慎であると、正面から弾劾を開始していた。8月1日、床次は民政党から脱党した。12月15日、床次竹二郎は訪中し、蒋介石、王正廷、楊宇霆、張学良ら南京政府の最高幹部と南京で会見した。

田健次郎（でん・けんじろう：原敬がかつて田を台湾総督に任じた）が翌29年6月、床次に対し、田中義一総裁の後継者には床次になって欲しい、ついではその立候補の意志を西園寺公、牧野伯に公言して欲しい、と勧奨している⁽⁴²⁾。同月、秦豊助・政友会総務からも、床次に同様の趣旨が請願された⁽⁴³⁾。だが秦には、平沼大本命が本音だっただろう。ところが生憎西園寺が平沼を大嫌いである事が天下周知なのである。

田中義一急逝の報に、久原房之助は田中の遺骸を守ることも失念し即日京都にスッ飛んだ。もちろん西園寺に相談するためだった。その旅の帰路の久原を観察すると、それまで久原は犬養党でなかったのに、突如犬養党の宣教師に変貌していた⁽⁴⁴⁾。犬養毅が政友会総裁に就任したのは、29年10月12日だった。田中急逝の2週間後である。

36年3月13日、平沼男爵（平沼は26年4月枢密院副議長に就任し、10月男爵

を受爵した)は、「枢府」(枢密院議長)にいいよ就任した(内大臣は湯浅)。平沼内閣を成立させた中心人物は、湯浅内府(内大臣)であった。湯浅の経歴は若槻内相(加藤高明内閣)内務次官を経た。湯浅内府は平沼枢密院副議長、平沼枢府、及び平沼内閣に互って平沼を支えた。平沼内閣の後に、阿部信行内閣が倒壊すると米内光政内閣を成立させる為に、湯浅は中心的な働きを担う。

従来は元老は諮問を受けると、後継首相候補者を奏上するという役目を担って来た。昨今ではその役目が枢府の役目に回って来ていた。平沼騏一郎の権勢は、今や元老にも匹敵し、陸軍部のそれを遥かに凌いだ。しかし正面衝突はいかにも不味いから、そこで平沼は、何らかの「奇策」を用いる手法を案出したのであり、それによって陸軍抑制を図ったと、歴史から推察する。平沼は、「満・蒙政策」と「朝鮮政治」を完全遮断し、朝鮮半島政治から陸軍の影響力を完全排除することを狙っていた。

戻ると、27年2月7日、大正天皇の大喪が行なわれた。他方、その前26年1月30日に、第1次若槻内閣が成立している。同26年2月15日に「新幹会」なる団体が創立された。その支会の規模は、実に驚くべき大きさだった。その支会は、東京、京都、大阪、名古屋、延辺(中国)、龍井(朝鮮半島)など149個所に設立された。会員数は4万人を優に越えた⁽⁴⁵⁾。「新幹会」の会長は、朝鮮日報社を経営する李商在(い・さんじえ)が就任した。同社会活動の広報役には、「朝鮮日報」主筆・安在鴻(あん・じえほん)が当たった。一方27年3月、上海において、李東寧が朝鮮亡命「臨時」政府の本部委員長に就任した⁽⁴⁶⁾。

注

- (1) 広瀬英太郎『三土忠造』1962年、183頁。
- (2) 『安達謙蔵氏談話記録政治談話速記録』ゆまに書房、1998年、121頁。
- (3) 瀧正雄・前田蓮山『床次竹二郎伝』伝記刊行会、1939年、618頁。
- (4) 水野錬太郎『論策と随筆』1937年、387頁。
- (5) 『床次竹二郎伝』、前掲書、623頁。
- (6) 1920年6月5日「ル・タン」
- (7) ジョージ・アキタ、ブランドン・パーマー『「日本の朝鮮統治」を検証する』草思社、2013年、71頁。
- (8) 『内務省史』第4巻、大霞会、1971年、101頁。
- (9) 『内務省史』第4巻、92頁。
- (10) 『鈴木喜三郎』鈴木喜三郎伝記編纂会、1944年、221頁。
- (11) 『水野錬太郎回想録』尚友倶楽部、1998年、401頁。李炯植『朝鮮総督府官僚の統治』吉川弘文館、2013年。
- (12) 『水野錬太郎回想録』前掲書、126、432頁。

- (13) 『床次竹二郎伝』前掲書, 618, 851頁.
- (14) 同書, 856頁.
- (15) 信夫清三郎『大正政治史』ケイ草書房, 1968年, 1080頁.
- (16) 『日本内閣記録』(3), 第一法規出版社, 1981年, 107頁.
- (17) 『久原房之助』伝記編纂会, 1970年, 408頁.
- (18) 『鈴木喜三郎』伝記編纂会, 1944年, 221頁.
- (19) 『三土忠造』前掲書, 235頁.
- (20) 信夫清三郎『日本政治史』(4), 南窓社, 1982年, 189頁.
- (21) 1932年4月3日「大阪毎日」
- (22) 『中橋徳五郎』中橋徳五郎翁伝記編纂会, 1944年, 550頁.
- (23) 岡崎邦輔『憲政回顧録』福岡日日新聞社東京連絡部, 1935年, 179頁.
- (24) 『江木翼伝』江木翼君伝記編纂会, 大空社, 1988年, 338頁.
- (25) 松村謙三『町田忠治伝』町田忠治翁伝記刊行会, 1960年, 222頁.
- (26) 『木戸幸一日記』上巻, 東京大学出版会, 1966年, 153頁.
- (27) 鳥海靖編『近代日本の転機』吉川弘文館, 2007年, 30頁.
- (28) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「倉富勇三郎日記」1931年12月12日
- (29) 1939年4月1日「中外商業新報」
- (30) 『久原房之助』前掲書, 383頁.
- (31) 『木戸幸一日記』上巻, 153頁.
- (32) 1934年7月4日「東京日日新聞」
- (33) 『床波竹二郎伝』前掲書, 823頁.
- (34) 朴永圭『朝鮮王朝実録』キネマ旬報社, 2012年, 470頁.
- (35) 池明観『韓国近現代史』明石書店, 2010年, 104頁.
- (36) 同書, 104頁.
- (37) 『侍従武官長・奈良武次日記・回想録』
- (38) 伊藤之雄『昭和天皇伝』文芸春秋社, 2011年, 222頁.
- (39) 1935年3月22日「外交部総務司から蒋介石宛て電」丁秋潔・宋平編『蒋介石書簡集』(下), みすず書房, 2001年.
- (40) 尾崎行雄『処世記』千倉書房, 1935年, 85頁.
- (41) 岡義武・林茂編『大正デモクラシー期の政治』(松本剛吉政治日誌) 岩波書店, 1993年.
- (42) 『田健次郎日記』7, 芙蓉書房, 2018年, 74頁.
- (43) 同書, 75頁.
- (44) 米本二郎『伝記・久原房之助翁を語る』リーブル, 1991年, 833頁.
- (45) 武田幸男『朝鮮史』山川出版社, 2000年, 296頁.
- (46) 『日本政治裁判史録』昭和・前, 第一法規, 1970年, 387頁.